

三原史跡めぐり

“失われた遺跡への哀愁・古を偲ぶ”

その1 山陽街道に沿って (2)

末 森 清 司

● とうのはま(遠の浜)

「古は白浜松原の美しき所なりと古老言い伝えり」今は失われた地名。

旧山陽道、仏ヶ峠を東(三原方面)に向って下ると、すぐ南側に宮浦中学校がある。このあたり「船山」(現三菱重工宮浦アパートが建っている所)迄の約400メートルの所が、「とうのはま」と呼ばれた地名のあった所である。今から約370年頃迄は、遠浅の海辺であった。北側はひくい山々、東に船山の小島、西は勝山(荒神山とも呼ばれている)にかこまれたちいさな入江の様な形であった。なぜ「遠のはま」という地名なのかかわからないけど、このあたりの地は沼田川河口であり、川の水が流す土砂がだんだんと堆積して干潟になり、遠浅の海辺だったことからその様に呼ばれたのだろうか？弓形の浜には古は松林であり砂浜の美しい所だったと古老の言い伝えがある。350年前よりこの干潟の海をうめたてやがて黄金みのる稲田と変っていった。つい最近迄は、みわたすかぎりの田園風景であったこのあたり、区画整備でうめたてられ、人家、宮浦中学校が建てられて古を偲にはほど遠い風景になってしまった。

古文書には次の様に記されている。

「備後国三原廻」

船山と荒神山の間の松原なり、すへて此辺を遠のはま共いへり。

● 船山「神功皇后船繋の伝説の地」

船山という小島今は無し

旧山陽道仏ヶ峠を東(三原方面)に進むと、前記「遠の浜」の古の地名があった所宮浦中学校を過ぎて道が大きく曲った所に三菱重工宮浦アパートが建っている所一帯が「船山」という小高い小島の様な丘とも呼べる小山があった。

昭和28年頃迄は形の良い古松が繁る美しい小山

だった。沼田川河口の和田沖干拓が始まった昭和30年頃よりこの山をけずりとりうめたてに使用し小山はすっかりなくなってしまって平坦な地となってしまった。今、この地が山で古松の繁る「船山」で美しい所だったという事は段々と人々から忘れられていく。この「船山」にも次の様な伝説が残っている。

「船山の伝説」

頼兼の土手の南つきあたった所にあり古松が生えて小高い丘となっている。この丘(山)は、神功皇后の伝説をもった地名として知られている。古に神功皇后が三韓征伐のために下向の折、一時こゝへ船を繋がれた故をもって「船山」と呼ばれる様になった。又、船山の地は、その時船の錨を下されたところと言われている。船をとめたと言われるのは今に岩礁の跡のある点よりも考えられる。当時このあたり三原湾西の入江に当り且沼田川河口であり船をとめるに都合の良い所だった。錨山の地は後年、三原城主浅野候おたちよりの御茶屋「水哉亭」があった。城主様が度々船山附近に御鷹狩にこられた所、御床所として利用され茶屋の庭に井戸が堀ってあり、その井戸の水を献上されたと言われている。

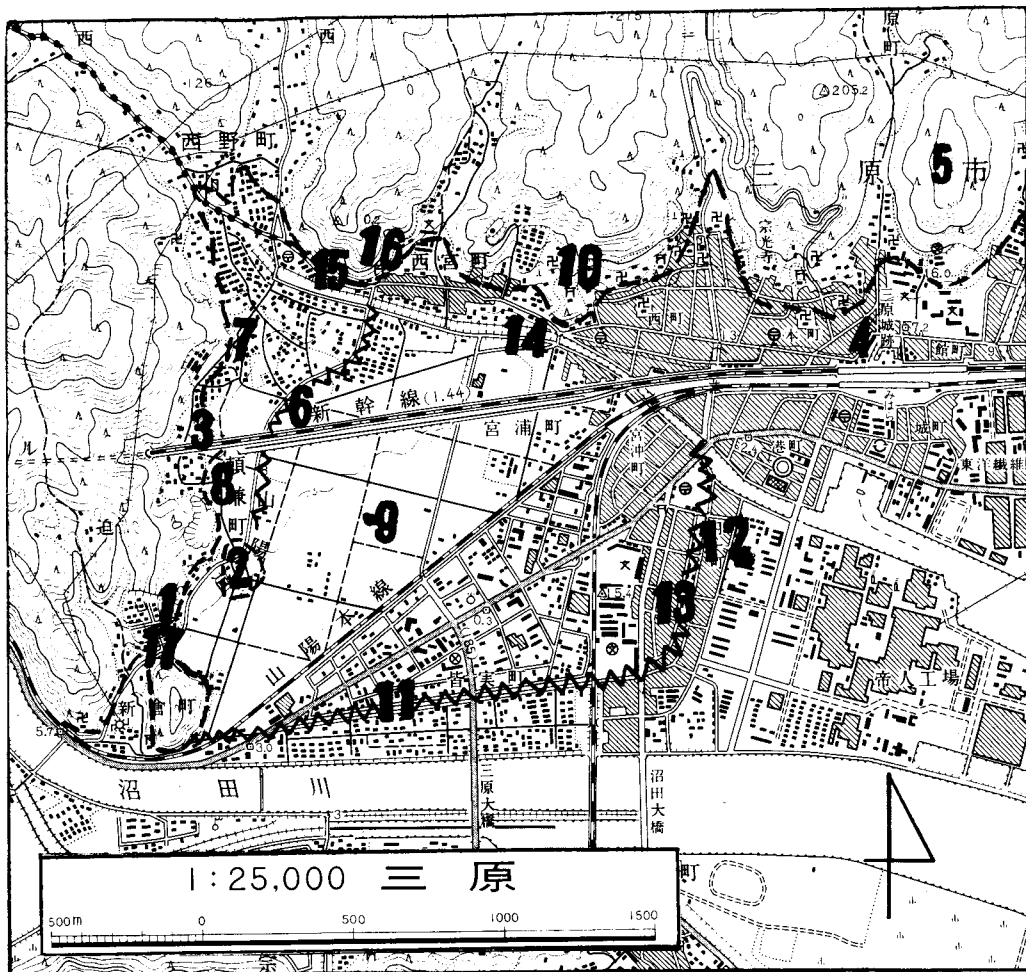
以上「三原高校郷土研究同好会 柞原第5号」より……又、古文書には次の様に記されている。

「備後国三原廻」

船山

頼兼土手の南へ行詰、往還の東に有 小山なり、神功皇后三韓征伐之時、此所に御船を寄せられし処也、依て船山といふ、今新開に御茶^(泉)有(水哉亭とて、御城主の別業あり)、其泉水の山を^(泉)船山と伝、其時御船^(の錨)をおろせし処なりといへり、又是より一里余沖にすくね島といふ小島あり、武内宿禰船かゝりし処なりといへり

「国郡志編集御用諸品書出 ニ 西野村 文化



----- 500年前の海岸線

..... 中世の山陽古道

〰〰〰〰 土手

- | | | |
|----------|----------------|--------------------|
| 1. とうのはま | 8. 横山新田 | 15. 船津（三原で1番古い船着場） |
| 2. 船山 | 9. 宮沖新田 | 16. 八坂神社 |
| 3. 頼兼城跡 | 10. 西の宮八幡宮 | 17. 仏ヶ峠 |
| 4. 三原城跡 | 11. 旧沼田川堤防皆実土手 | |
| 5. 桜山城跡 | 12. 甚五郎人柱の松 | |
| 6. 頼兼土手 | 13. 宮沖土手 | |
| 7. 頼兼新田 | 14. 西野川土手 | |

◎ 三原史跡めぐり附図

11年」舟山南ノ根ニ有

一御用井戸 新開水哉ニ而時ニ取御用ひ之水也。
「国郡志編集御用諸品書出ニ 宮沖新開 文化11年」水哉 三拾四番之内

一御茶屋壺ヶ所 新開無御座内者、鏡山与申小島ニ而御座候所当時御庭内ニ相成居申候

甲斐様新開之内御鷹野御出被為遊候節、御腰休所也、太守様御上下右同断、宝曆四甲戌年 御立寄被為遊候、右之節御供方御認等御頼御人数ニ応ニ村方々仕出申候。

今、三菱重工宮浦アパートが建っている地域をまわってみた。宮浦地区土地区画整備でこのあたりどんだうめたてられて、人家が建っている。往年の面影はなくなってしまったが、アパートの南側広場の金あみがはってある下側にわずかに往時の岩礁の跡らしき所が残っている。当時小島だった頃の波打ぎわだったなごりが見える。しかしこの跡も数年後にはなくなってしまふ事だろう。

古の船山今は無く又その地名も消えて行く……

● 頼兼土手「旧山陽道松並木」

往古の風情ある面影今はなし。

三原駅からバスで西野行、又は沼田行に乗って10分程の所にある西野川にかゝる梅観橋という名の停留所より南の方へ「船出」迄の土手の様な形をした道路が往古の頼兼の土手（汐止堤防）であり、江戸時代よりの山陽街道である。昭和19年頃迄はこの街道には古い松並木が残っており風情ある往古のなごりをとどめていた。古文書によっても宝永年間には74本、文化年間には90本植えられていたとの記事が見える。終戦の年（昭和20年）、松根油をとるためにすべて切りたおされ根っこは堀り出してしまった。その後松の木は植えられる事もなく、唯の田舎道に（現在市道）なり果てしまった。又この道は今の国道2号線が出来る迄は国道でもあった。

この道路が土手の形になっているのは、江戸時代初期頃迄は、このあたりの土地は沼田川と西野川河口で三原湾西部の入江で遠浅の海あった。

今の頼兼町平担部、宮浦町、皆実町、宮沖町、円一町一帯はすべて海であり、元和の頃（今から370年前）より始まった干拓工事によって開かれ陸地となり田畑が開かれていった。三原湾内の沼田川河口の大規模な干拓工事を行うため最初に作られたと思われるのがこの頼兼の汐止堤防である。この土手によって元和8年（1622）頼兼新田、正保元年（1644）横山新田が開かれたと伝えられている。元禄年間には頼兼土手の東側一帯の宮沖新田（現在の宮浦町、皆実町、宮沖町）の干拓が行われている。同時に頼兼土手は新しく山陽道にするため^{*}廃城になってしまった頼兼城跡の石垣をとりこわして道路の改修に使用されたと伝えられている。

この頼兼土手の山陽街道の左右の干拓地は春は麦、秋は稲の黄金色なびく三原の穀倉地と変わったのである。この頼兼の山陽道を行きかう人々は広々とした田園地の向うに見える三原城をながめ、遠く海のかなたすくね島、因島をながめながら旅した事だろう。今は田園地はうめたてられ、人家が建ち当時の姿を想像する事すら出来ない風景となっている。

古文書に頼兼土手に関する記事を調べてみると次の様にあるので転記しておく。

「備後国三原廻」

頼兼封疆

茅町前々南へ長堤なり、往還道ニして宮沖新開西の境なり。

「国郡志編集御用諸品書出ニ 西野村 文化二年」一茅町ヨリ仏ヶ峠沼田下村境迄拾三町余本往還（頼兼土手道）

一往還並木松 但し 七拾四本 宝永己年
御植分
九拾本 文化五辰年
御植分

「浅野家記」

一元和八壬戌年比、三原西野村頼兼新開築也
一正保元甲申年比、三原西野村横山新開築也
「国郡志御用ニ付下しらへ書出帳 御調郡西野村 文政2年」

一古跡

古往還

東桜山之後大目木より、西之宮山ヲ越^{りて}テ下手与申所へ出、湯佐近山之西むろ木之鼻ヲ越へ小浦通り、祇園之西法經塔之下船津、夫より近江堂へ渡、大串山ヲ越テ芸州へ移候由申伝候

扶桑拾葉集源貞世、道行ぶりニ

五月十九日備後の尾道より下略

むかひにひかたを入たてたる山を、いんのしまといふ也、それを行過て備後と安芸国のさかひをいつる、よこおれる山中にかやふける堂あり、比ふもとまで入海つゞきて、沼田川なかれ落合あり。

右横をれると御座候者、唯今の掛田頼兼大串横山の鼻迄、皆北^右南へ出タル事ニ可有御座、其山中にかやふける堂者、大串大日堂ニ可有御座歟与奉存候、扱新往還者 御城被為築候と少シ年ヲ隔テ、宮山之鼻室木之鼻ヲ堀下ケテ、祇園之鼻と船出迄之間者海辺へ新タニ築上、土手内潮廻在テ、頼兼沖ニ大唐樋ヲ被居、往還所ニ寄高サ壹丈余、此時頼兼城跡之石垣取崩シ、右往還外手石垣ニ相成候由、然^(後)ル処元録十三年新開御築ニ付、往還内之潮廻シ者同十四年御高附ニ相成、外ト手石垣普請者御上より被成遣、大唐樋跡普請之節者、栗なる齒朶等御銀出ニ相成候。

※頼兼城跡については山城志第2巻5号を参照下さい。

参考文献

- 三原市史 通史編 資料編(一)(二)
- 柞原第五号 三原高校郷土研究同好会
- 三原昔話 白松光太著
- 豊田郡誌

以上参考にいたしました。

● 旧街道松並木に思う

今から約400年前多くの住民(農民)の人々の血と汗の労力によって築かれた頼兼土手の旧山陽道も数年前より始まった宮浦土地区画整備事業によって、その姿が消えつゝあるのはさびしい事である。土地区画整備計画の中にせめて旧街道をそっくり残し公園道路の様な姿にして、この道の両側に松を植え又三原市の花でもある

さつきを植えて色どり、買物、通学、ジョギング、老人たちの散歩、自転車専用等の道路として利用したらどんなに楽しく又この道の由来を記した案内板を建てると、この道を利用する人々が先人の苦労を偲ぶ事により、いっそうの郷土への愛着が深まるのではなからうか。

筆者の家内の里は愛知県安城市であるが、毎年帰ると楽しみな事がひとつある。現国道一号線に沿って所々に残された旧東海道の松並木を見ることである。この松並木も昭和40年代迄は、車の通行、家や商店工場からの車の出入、商店工場の看板が見えにくい等の理由でじゃまもの扱いをされ、切られたり取除かれたりして、だんだんと消えていきつゝあった。

所が10年ほど前より地区の郷土を愛する方々によって「東海道松並木を残そう」という運動が持上り、痛んだ古松は手入れをし、取除かれた所や切られた跡には新しく若松を植えられてその松を地区の人々や街道筋の家の方々が心をこめて手入れをされている事はうれしい事である。おかげでこの街道は年々往古の風情ある姿をとりもどしつつあり、筆者も毎年帰る度この街道松並木を歩いてみるのを楽しみにしている。広島県下にも由緒ある街道は多く残っている。国道二号線よりはづれて往古のなごりをそのまま残している山陽道、せめて松でも植えて当時の面影を復活させてみてはいかがだろうか。街道に植えた松等の並木を手入れをする事により古人たちの苦労を偲び又後世に伝えていくのが今の時代の我々のつとめではなからうか。今はこわされてしまって唯の車が走るだけの道に変わりつゝある頼兼土手山陽街道、この街道を、築き造り、松を植え育てた古人たちが今の姿を見るといかに思うだろうか。往時の人々の苦労を偲びつつ思いつゝ記してみた……………。

(三原市新倉町6-20)